Japan Society of Educational Information

プレゼンテーションの改善を図る発想能力の育成に関する考察

谷口由美子*1

【概要】筆者は教員養成および授業改善をめざした取り組みとして，情報の表現伝達（プレゼンテーション）技術の向上を図る訓練プログラムの開発・実践を行ってきた．本稿では，京都市立芸術大学美術学部生を対象に実施した2003年度集中講義（教職課程科目）「情報処理基礎」より，Microsoft® PowerPoint®利用の教材作成とマイクロプレゼンテーションについて報告した．
【キーワード】プレゼンテーション，教員養成，発想，情報処理，情報教育

１．はじめに

（本稿では以下，Microsoft® PowerPoint®，Microsoft® Word® をそれぞれ PowerPoint，Word と略す）

本学美術学部の教職課程は，中学校美術科，高等学校美術科，高等学校工芸科の教員養成を目的とする．

筆者が担当する「情報処理基礎」の授業は，上記の教職免許状を取得するための必修科目「情報機器の操作」の中の一つ(2 単位選択履修)として開設されている．情報機器等の操作経験の有無は問わず，1～4 回生の教職希望者のみを履修対象としている．

本学の学生は，「コンピュータ演習」や「情報科学」の授業において，ペイント系・ドロー系ソフトによる絵画・イラスト制作や画像処理，3DCG(静止画・動画)制作，HTML によるホームページ制作などを通して，情報処理技術を習得できるが，そこでは，主に，美術表現としての映像メディア表現に関する知識技能の育成に重きが置かれている．

ところが，美術教師には，各専門分野での美術表現に関する知識技能はもとより，教師として授業を実践する能力が求められる．

学生は教壇に立つ前に，授業設計，教材作成，コミュニケーション，情報の表現伝達(プレゼンテーション)等に関する基礎基本的な知識技能をトレーニングする必要がある．

そこで本授業では，美術教育における教育メディアの活用という観点から，情報の表現伝達(プレゼンテーション)の基礎・基本的な知識技能の習得を目的に，手書き～Word～PowerPoint への段階的使用により「自分を語る(自己紹介)」提示教材を作成して，随時，マイクロプレゼンテーションを実施した．

２．内容・方法

（１）授業概要

①日時：(前期)2003 年 8/4～8/7，計 30 時間
　　(後期)2004 年 1/4～1/7，計 30 時間
②対象：京都市立芸術大学美術学部生
　　(前期)13 名・(後期)11 名
　　受講生内訳を表 1 に示す．
③場所：大学会館情報処理室
④授業科目名：集中講義「情報処理基礎」
⑤内容：概要を表 2 に示す．

表１ 受講生内訳

	学科・専攻		学年	単位：〔人〕 男	女	計
前期	総合芸術学科		4	0	1	1
	美術科	油画	4	0	1	1
			3	0	2	2
		版画	2	1	0	1
		総合基礎	1	0	4	4
	デザイン科	総合基礎	1	0	2	1
	工芸科	染織	4	0	1	1
		総合基礎	1	0	1	1
	計			1	12	13

	学科・専攻		学年	単位：〔人〕 男	女	計
後期	美術科	日本画	2	0	1	1
		日本画基礎	1	0	3	3
		油画基礎	1	1	1	2
	工芸科	染織	4	1	0	1
		染織基礎	1	0	2	2
		陶磁器基礎	1	0	1	1
		漆工基礎	1	0	1	1
	計			2	9	11

*1 TANIGUCHI, Yumiko ：京都市立芸術大学美術学部　e-mail= yumik@oak.ocn.ne.jp

NII-Electronic Library Service

Japan Society of Educational Information

（2）情報処理演習の概要

演習の内容・方法を以下に示す(表2参照).

①情報処理演習1(手書きによる提示教材作成)

A4普通紙に油性マーカー(8色)を用いて手書きでセルフシート(自己紹介)を作成した.

次に，作成した提示教材と OHC(:Overhead Camera)を利用して，受講生全員を対象に，マイクロプレゼンテーションを実施した.

また質疑応答の時間を設け，聴き手側から「その人についてもっと詳しく知りたい事」を質問し，プレゼンターが回答した.

②情報処理演習2(Word利用の提示教材作成)

最初に，Word の Font サンプルを作成した.次に，上記①で作成した手書き教材を基に Word で白黒の印刷物としてのセルフシートを作成した. 表現様式は文字のみとし，ワードアートやイラスト等の挿入を禁じた. また，随時，印刷して書面を確認することとした.

印刷したセルフシートを他の受講者に配布し中間合評を行い，教材の改善を行った.

③情報処理演習3_1

(PowerPoint 利用の提示教材作成)

10 分程度のプレゼンテーションを前提に，以下の手順で，PowerPoint 利用の提示教材(ﾀｲﾄﾙｽﾗｲﾄﾞ 1枚＋ｽﾗｲﾄﾞ 4枚以内)を作成した.

1)PowerPoint の基本的な操作の体験

2)スライドの構想

(ストーリー・ボード[1]を活用)

3)スライド作成

4)スライドの中間合評と改善

PowerPoint には多様なツールバーやボタン等が準備されており，初心者でも簡便に，文字入力やスライド編集ができるようになっている. しかし，本授業ではあえてそれらの使用を推奨せず，[メニューバー] ⇒ [挿入] ⇒ [新しいスライド]・[図]・[テキストボックス]等から入力・編集することとした.

さらに操作テキストには，[ダイアログボックス]等の実図を示すだけに止め，具体的な操作手順や方法を，学生に逐次記入させた.

これは，コンピュータも道具の一つであり，操作する人間が「この場所に，この文字を，この大きさで･･･」と命令を出さなければ，具現化されない，すなわち，明確な表現意図が重要であることを意識させるためである.

表2 集中講義「情報処理基礎」授業概要(前後期共通)

		概　　要
1日目	午前	□講義 ・教育メディアと情報活用能力 ・プレゼンテーション ●情報処理演習1 (1)手書きによる提示教材作成 (2)ﾏｲｸﾛﾌﾟﾚｾﾞﾝﾃｰｼｮﾝの実施と評価 □合評
	午後	●情報処理演習2 (1)Word Font サンプル作成 (2)Word 利用の提示教材作成 (3)教材の中間合評 (4)教材の改善 □合評
2日目	午前	□講義 ・Visual Presentation ●情報処理演習3_1 (1)PowerPoint 利用の提示教材作成 ① Plan(スライドの構想)
	午後	② Do_1(スライド作成)
3日目	午前	□講義 ・ﾌﾟﾚｾﾞﾝﾃｰｼｮﾝｿﾌﾄ による教材設計 ●情報処理演習3_1 継続 ③ Do_2(スライド作成継続)
	午後	(2)スライドの中間合評 (3)スライドの改善
4日目	午前	●情報処理演習3_2 (4)提示教材の完成 (5)ﾏｲｸﾛﾌﾟﾚｾﾞﾝﾃｰｼｮﾝの準備
	午後	(6)ﾏｲｸﾛﾌﾟﾚｾﾞﾝﾃｰｼｮﾝの実施と評価 □合評 □レポート作成・提出

④情報処理演習3_2

(PowerPoint 利用のマイクロプレゼンテーション)

≪プレゼンテーションテーマ≫

自分を語る(自己紹介)･･････社会的属性の紹介よりも，今まで何をしてきて，将来何をしたいのか等を語ることを重視.

各自の PowerPoint 教材を用いて一人ずつマイクロプレゼンテーション(10 分程度)を実施した. 各発表終了後，質疑応答の時間を設定した. また，プレゼンター以外の学生は評価者として，各プレゼンターを評価した.

評価の観点[2]は，言語，非言語(言語関連)，非言語(その他)，教育メディア利用，理解度(知識獲得)，関心度(情意関心)，定着度の7つとした. 加えて，工夫されている点と改善を要する点についてコメントを記し，各プレゼンターへ返却した.

NII-Electronic Library Service

Japan Society of Educational Information

３．結果・考察

（１）受講生のレディネス

授業開始前に，各種アプリケーションソフト等の操作経験に関して各受講者に聞き取り調査を行った．結果を図１，２に示す．

前後期共通して，インターネット検索以外コンピュータを使用したことがない学生が，約半数を占めた．そして，電子メールよりも携帯メールの使用頻度が高かった．

Word を日常的に利用し文書作成している(実践可能)と回答した学生は，前期：３名，後期：１名であった．

中・高等学校の授業等で Word を操作した経験がある(操作経験有)と回答した学生は，前期：５名，後期：４名であった．

PowerPoint については，研究会やゼミでの発表でも活用しており実践可能な学生は，総合芸術学科４回生１名(前期)のみであった．

また，高等学校の授業で PowerPoint を使って教材作成と発表をした経験があった学生は工芸(陶磁器)科１回生１名(後期)であった．

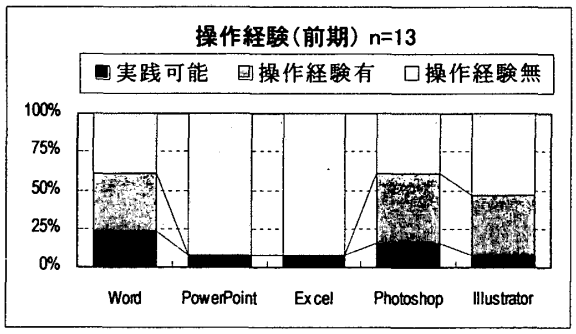

図１ 受講生のレディネス(前期)

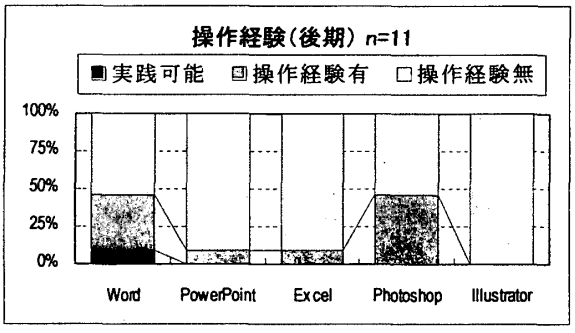

図２ 受講生のレディネス(後期)

（２）手書きによる提示教材作成

セルフシートの内容は「自分を語る」ことを旨とし，その表現様式は美術的デザイン性の追求ではなく，一般の人が一見(一読)しただけで理解できるように，対象者を意識した表現伝達を推奨した．

ところが前期では，発表原稿のような長文(ですます調)が目立ち，過去の経歴を時系列で記述しただけのもの，社会的属性(氏名・年齢・専攻学科・学年・血液型・星座等)を列挙しただけのものもあった．

後期では，視覚伝達を意識した表現傾向が見られ，文字を絵としてあつかいレイアウトや配色を工夫する等，独創性の高いものが多かった．

初めてのマイクロプレゼンテーションでは，前後期共通して，提示している情報と同一のことを，聴き手を見ずスクリーンを見ながら話す学生が大半を占めた．

（３）Word 利用の提示教材作成

手書き教材の合評で，聴き手が求める情報と自分が提供した情報との間のズレに気づいたと発言した学生が多かった．具体的には，

・「自分自身を語るには，社会的属性だけでは不十分だし，聴き手も興味を持たない」
・「趣味が読書ならば，書籍名を言うだけでなく，その本にまつわるエピソードを語るか語らないかで大きな差が出る」等である．

常日頃，本学の学生は，美術表現を通して，色・形等による表現伝達を追及しているため，「モノクロで文字のみ」という条件に，困難さを感じている学生が多かった．また，自分のイメージが表現しやすい Font 選びに執着する学生も多かった．

中間合評を経て，長文や会話文は見られなくなった．また，余白の工夫，文字間隔よりも行間隔を意識した単語・項目のレイアウト，箇条書きや表仕立て等へと改善された．

（４）PowerPoint 利用提示教材の構想･作成とマイクロプレゼンテーション

学生は，本授業の最後に総括として，次の３点についてレポートを作成し提出した．

1)PowerPoint 利用の提示教材を構想し，作成する際の注意点と自己評価
2)プレゼンテーションに関する自己評価
3)本授業に対する評価

レポートの記述内容を質的に分析した結果，PowerPoint 利用の提示教材の構想・作成における注意点や今後の課題として，特徴的な記述が抽出できた．具体例を表３,４に示す．それは，次の３つに集約される．

NII-Electronic Library Service

Japan Society of Educational Information

1)自分中心から相手中心のスライドづくり
2)客観的視点の導入
3)情論合いまった言語(ことば)による発想

「自分中心から相手中心のスライドづくり」については，表 3 の 1a～1c に示すように，学生は当初，自分の表現したいことを「どう見せるか」にとらわれた(自分中心)傾向があった．それが徐々に，相手は何を感じるか，理解できるか等，相手には「どう見えるか」に着目するようになり，最終的に，相手からの反応を予想した(相手中心)表現を工夫するようになった．

このような変化を生んだ要因の一つとして学生は，「客観的に見る力・客観視」を挙げている．(表 3 の 2a, 2b 参照)

「客観的視点の導入」については中間合評の効果を強調したい．

学生は日頃，作品制作の総括として合評を行っており，作品の制作意図について語り，相互評価することに慣れている．本授業でも作品合評と同様，視覚的な表現伝達の専門家を志す者の目で見て評価し，発言していた．よって，そこで指摘されたことは，良い内容であれ，改善を求める内容であれ，一般的な妥当性を有すると考えられる．教材に対するそのような評価(KR : Knowledge of results)が，即時に，フィードバックされ，相手中心への軌道修正を可能にしたと推察される．

何をどのように表現するかをストーリー・ボード上に視覚化する段階から，スライドのデザインは多彩で独創性に富んでいた．だが，表 3 の 3a のように，言語(文字・ことば)で的確に表現することに苦手意識を示す学生もいた．プレゼンテーションも含めて学生は，色・形・映像等のイメージによる発想に比べ言語による発想を苦手とする傾向を見せた．

これらは，本学の学生が美術的な表現能力という特化された専門性を有することに起因すると考えられる．しかし，視覚的言語とされる色・形で表現するのと同様に，抽象的な記号としての言語(ことば)に，感情や思いを合致させた「情論合いまった言語(ことば)」を適切に選択できる能力は，教材の構想だけでなく，プレゼンテーションにおいても重要である．今後は，教材設計(発想・構想)についても検討し，芸大生の情報の表現伝達能力を養う授業実践を継続する予定である．

表 3 記述具体例(PowerPoint 教材の構想・作成)

1a	教材は作品ではない．教材というものについて，自分自身の作品とは切り離して考えていく必要がある．自分が創りたいデザインや使いたい色だけでスライドを作ってはいけない．
1b	授業の教材として構想する時はまず，「重要な内容を相手に伝えるのだ」ということを，ビジュアル面より前に考えるべき．
1c	「伝えるべきことは何なのか」を常に頭に置いて見る人がわかりやすく，伝わりやすくするために自分が一番何をすべきかを考えた．
2a	人に自分が思っている事を伝えるためには，自分が思う以上に意識してたくさんの工夫をしなければならない．芸大という人と違った事を追求している場では，中々気づかないが，情報を皆にわかってもらうためには，できるだけ多くのできるだけ一般的な目をもち，客観的に見る力を養わなければならない．
2b	何かを作っていると，どうしてもどんどん自分だけの目で見るようになってしまい，客観的に観ることを忘れてしまう．今回も忘れかけていたが，「Visual Presentation」や「印象に残る画面」の講義を聴いて，客観的視点を思い出すことができた．一度できたと思っても見直してみると直すべき所がたくさんあり，やはり，客観視することは大切だと思った．
3a	初めて PowerPoint を使ってみて，人に簡潔に文字やことばで伝えることの難しさを知った．手書きでなら何とでもできるのに，制限のある色や形等で，どれだけ見易く，伝えたい事を伝えられるかを色々工夫しなければならず，大変だった．
3b	口頭で伝えるのだから，項目(ｷｰﾜｰﾄﾞ)だけを抜き出して画面に提示して，そこから話を展開させていく方法は自分でもまずまずの出来だった．

表 4 記述具体例(プレゼンテーション)

1	人前で堂々としゃべる事ができるようになりたいと実感させられ，そのためのトレーニングとしては，最適だった．今回の集中講義は非常に自分のためになった．
2	プレゼンの時にパソコンがあると心強い． だからといってパソコンに頼りすぎてはいざという時に全く何もできない状態になる． 写真や文面以上の何かを，伝えたいと思うのなら，自分自身が，しっかりと伝えようと思わなければ，相手を感動させることはできない．
3	「何を」表現伝達するかということが一番大切で，構成も内容も，自分が，こうしたいという，明確なヴィジョンがあってこそできるもの． そして，「表現伝達するくせ」というか，表現伝達することに慣れておかないと，ここぞ，という時に動けなくなる．

[1] 谷口由美子，「学習情報研究　2002 年 11 月号」，学習ソフトウェア情報研究センター，pp. 39-42
[2] 林　徳治 編著，『情報社会を生き抜くプレゼンテーション技術』，ぎょうせい，2000，pp. 90-91

NII-Electronic Library Service